

甲 種

緒 言

主観は各人に依て異なる。而して評論は全然主観的のものだ。故に各人の評論は各人に依て異なる。従て我輩の評論も他人のそれと異なる。悪評を被ると雖も賞讃を辱ふすと雖も共に悲観することもいらす樂觀することも無い。我輩は不幸にして神ではない。矢張り人間の末席を汚すもの評論の又評論は當然受く可きものであらう。

生命躍動の歡喜 如何にも堂々たる題ですね。

生命とか自覺とか云ふ言葉は當今の流行言ですよ。殊に學生間には、最も歡迎さるゝ果報者です。成程ね。自覺なくして、するゝと自己の外部的勢力に引摺られて行くのは、奴隷の生活と申されますね。

竹 内 良 三 郎

奴隷の生活は眞の生活ぢやない、單なる存在に過ぎないでしょう。レーベンがザインに變化するなんて文法では決して許されもせずあり得もしない事實ですがね、人生にはそれがあり得るのです、人生は獨乙語の文法よりや少しは複雑ですね、變化が多いから。シエクスピヤのハムレットに「永らう可きか永らう可からざるかは大なる疑問なり」と申す文句があるが獨譯には *Sein oder nicht sein ist eine grosse Frage.* としてある。成程うまく譯したものだ、單に世に存在するだけでは全く生き甲斐がないから是大なる疑問の生ずる所であつたでしょうや呵々。生活と云ふものは單なる存在よりも少しく有意義なものであり尊いものであらうと思はれます。

懷疑派の祖「ロン」と申す人が「Do as you will, for there is such things as right or wrong.」と申して居ります。又エビクリアンは俗界を超脱して精神的快樂を求めなさいと教へて居る。キニツク派は克己主義を主張して居ります、妙なものです、其結果か何だか知りませんがネロの様な我儘な暴君も出ればソクラテスの様な聖哲も出る、ダイオゼニースの如き克己家も輩出しましたね。然し此等幾多の教と申すものは、要するに其根底は皆吾人の自覺を促して居るものに過ぎないと思はれます、自己を考へよ、社會に囚はるゝなど申すことです。筆者の主眼とする所か此處にあるのではなからうかと思はれます。吾人は社會に順應して行かなければ生活を完ふすることが出来ませぬが、あまりに之に過ぐると所謂月並の人間が出来上り所謂社會の奴隸となつて自己の生活を失はねばなりませんよ。然し社會に逆行して迄も自己を主張したり總ての自己の周圍を無視して自己を總ての方面に形成し表白し様とすると、自己と社會とが兩立せずして吾人の社會的活動乃至は生活と云ふものは全然破壊されてしまいます、「水清

ければ魚住まず濁れば真如の月宿らず」とは實に此間の消息を申したものでしょうね。處世術の妙味も六ヶ敷いのも此點に御座候。

筆者は自己と云ふものを非常に重大視したが爲自己萬能で社會とか他人とか外部的勢力とか云ふものを一蹴し去たかの感がないではないが然し是は文章の行拘りとも云ふ可きもので勢ひ或一つの事柄を深く吾人の心に吹込まうとするには其事柄一つを誇張せねばならぬでしょう此點は大眼に見て置かねばね

曙を見るまで

一寸いゝ題ですわ「自然と人生」

にありをうな。書き出しが何か知ら芝居の鮮かなバツクか寧ろキネオラマを見て居る様な感じですね、蝶だか鳥だかが戯れて居るとこなんざそつくりだね然しですね。文章は繪畫や、意匠や畫案とは、ちと違ひますでしよう只鮮かで只、きれいであつても文章は決して生きて來ないので、文章は余りに鮮か過ぎると繪を見る様な感じがして實物を見る様な感じが致しません、芝居のバツクやキネオラマの様なものは余りに正直に實物に似せると却て興味をそぎます、あゝ云ふものは、或程度迄不自然な極端を現

はさねば観客の心を引くことは出来ないものです、文章の方は之と異り余り鮮かであまり飾り過ぐるとその余りの鮮かさ美しさに頭の内で實際の風景を聯想させる余地がなくなる爲、只鮮かだ美しいと云ふだけで、心に感動を興へると云ふことが出来ませぬ殊に隨筆などと申すものは、やわらかに來なければなりません、余りに鮮かだ美しいで強よ過きると、その場面が静止してしまつて川も山も野も畑も、鳥も、雲もバツクにあるもの、様に動かぬ美しさとなります、動いて居る自然は決して静止して居る自然の様に鮮かではないが生命があります、活動寫眞は幻燈の如く、鮮かだ美しいではありませんが矢張り生命があります。

そんな美しいキノオラマに夢の如く見とれてゐると、突然妙な醉漢だか狂人だか得體の知れぬものが然かもザブザブと川へ這入て溺れ死ぬ。何たる事こわしでしょう夢が破れて現實暴露の悲哀を感じたと云ふ氣分です。そうかと思ふとやがて月が高空に懸て二人の影が地上に落ちるとこなぞは、どう最負目に見てもキノオラマバツクそつくり、淺草あたり

へ持て行たら随分歓迎されますでしょう——良藥は口に苦し——失禮。

秋 秋と芋堀の百姓と啄木の詩と、此三者の配合具合では可成面白い「秋」が出来るだらうが、惜しい哉此書き振は、此芋堀の百姓と啄木の歌とが秋の氣分を排斥しつくして、文章の何處を見ても秋らしい氣分の染み入る様な場所がない、流石に樗牛などはうまいものだね「淋しき哉秋の色や鳥は翼を收めて高くとばす……」流石に梁川などは深刻だね「秋の空に剛明の家あり秋の潭に瀟默の知あり……あれこれをあつめて霞む春の臙ろを人生の夢と見ば秋は直ちにこれ覺醒なり事實也」終日秋を郊外に求めて得ず、たま／＼、夕日鮮かに結び出でたる赤柿の枝もたわ／＼に實るを見て、秋即ち此處にありと呼びぬ」

筆者の秋には、百姓や其他の附屬物が余りに多過ぎて肝心の秋其物に觸れて居る所が少い、勿論芋堀の百姓だつて秋其物の一部分には相違ないが、私が中學校の時學んだ英語の本に「ミラー・オブ・ザ・デー」と云ふデー川の粉屋と申す題の文章があつた多くの人は一度は御目にかつたことがあるでしよ

うが筆者の秋も、此文章の様な態裁に作り代へたら却て面白からうと思はれます。

思ひ出すまゝ、旅行記です、旅行記と云ふも

のは余程注意せぬと無味乾燥に落ち入り易いものです。筆者自身は自分で實際踏破して来た所だけに思ひ出も深く、自分の書いた旅行記を見ても頗る面白い。又同所を旅行した経験のある人には面白くも讀めませうが、経験なき人には更に面白くないのは當然である。「何日何時何處を發し、何處着車にて、何山麓に至り、それより一時間にして頂上に至り風景を眺めて下山、頗る疲勞せり」こんな旅行記ぢや旅行案内記と申した方が適當で、隨筆とか文章とか云ふものゝ價値は少しも認められませぬ、旅行記には、奇聞。珍談。奇遇。冒險。と云た様なことを多く乗せねば旅行記は引き立ちませぬ、此點で最もよく旅行記を小説的面白さを以て讀ませるのは彼の杉村楚人冠です、彼の旅行記は、つまらぬ小説より余程面白い。「大英遊記」や「戦」に使用して「などは實に此種のものゝ白眉でしょう。筆者の旅行記は、事實の記述に止り感想が非常に少く、且つ旅行案内式であ

る、故に、朝鮮へでも旅行した人は面白くも讀め様が、旅行せぬ私共には何等の面白味を與へてくれぬ然し感心なことには随分詳細に亘て「思ひ出した」ものである。

休暇の獲物

同じく朝鮮の旅行記。然し此方は

割合によく觀察が行き届て、比較的私共にも興味を以て讀せる……と申して、あまり安心してはなりませんよ、あとで、どんな毒舌を弄するかわかりませんものね。此旅行記には、前のものより余程色氣があり内地の色々の事と朝鮮のことゝ比較などしてある點などは、一寸話せませぬ。然しです。京城と熊本とを比較するのはちと無理な氣がしますがねごうでしょう？。抑々比較の對象には其總ての點に於て、或は其大部分の點に就て、反對であるか類似して居るかどちらかの性質を帯ひた物を取て來ねばうそです、例へば五高生と一高生とを比較するのはよいが五高生と、高等商業の生徒を比較したり音楽學校や盲啞學校の生徒と比較した所で、比較がうまく行く筈はありません、其極端に相違し極端に類似して居る所に比較の面白味も趣味もあるのでは

ないでしようか。然るに京城と熊本——そこに何等の因果關係があるでしようか、兩者間に、どんなに面白いコントラストがありませうか、筆者は、京城を明瞭に吾人の頭に浮ばしむ可く其手段として、私共の最もよく知て居る熊本を比較に出したものでしようが此的はちとはずれては居ないでしようか？。

古代の日本　大化の改新に至る迄の經濟史でも申す可きもので、比較的面白くは書いてある様であるが又余程ドグマチックの所がある、歴史などは隨筆や所謂論文とは異り理窟の附け様でどうでもなると云ふ様な淺薄な態度で論じられては甚だ迷惑で考古學と連關して、十分各方面の研究をなし、証據物件を調査して歸納的論斷に出でねばならぬ性質のものである、故に古代の日本に對しては、余り斷言的のことを云て居る書物はなく「一説には、此々、又一説には此々と云てあるが現在こんな証據があるのだから此説がほんとうなものだらう」位な程度である、強て、斷言的に云はんとすると木村鷹太郎氏の如き笑を招くに至る。日本の國家が家族制度から次第に發達したものだ云ふ根據は頗る深いものが

あり余程な確實さがあるにも拘らず筆者は之を一笑に附し、國家は征服に依て出來たものだとして居られる様であるが實は征服と申す事は國家が出來て後國家擁護の一手段として行はれることで、それが國家の起源をなすなど論斷せらるゝは、大ドグマたるをまぬかれぬと思はれます、日本の太古に於て、神武天皇や其他歴代の天皇が熊襲くまなどの土着の蕃族を征服されたのは既に日本國家成立後であつて、日本帝國は既に、天照太神が天孫瓊々杵尊に、三種の神器を御渡しになり「葦原千百秋之瑞穗國者是吾子孫可王之地宣爾皇孫就而治焉行矣寶祚之隆當與天壤無窮矣」と申してから帝國の國体が確立すると共に帝國の基礎が又此處に築かれたわけで、熊襲や諸種の蕃族を征服したのは國家を設立せんが爲にせるものでなく之を擁護維持せんとする手段的のものであらうと思ふがどうでしようか征服は國家の維持發達には必要なる要件ではありませうが國家が征服によりて起たものだ云ふ申す説には左袒出來兼ねます。

西川 巖

秋 気分はよく現はれておるが、文章をもう少し精練してほしい。稍書きなぐつたといふ氣味がある。然し作者としては、よい所へ氣が附いたものだと思ふ。

曙を見るまで 暗黒を脱して光明に入つた喜悅を描いたものである。極めて單純な思想であるが、全体の結構をもう少し大きなものにして見たら、もつと面白いものが出來そうだと思はれる。是丈だけでは少し貧弱だ。文章もまだ精練が足りない。

夏期休暇中の獲物 朝鮮の人情風俗さまざま面白く描かれておる。「思ひ出すまゝ」と相併んで紀行文の双壁である。書き振りに未だ辿々しい初心な所があるが、却て可愛い、氣がする。一段文章を練つたら、嚙よいものとなるだらう。根氣よくこんな長篇を書かれたる勞は多とせねばなるまい。

思ひ出すまゝ、これは山東見聞記である、行文頗る達者、達筆といふべしだ。

古代の日本 龙然たる學問的大論文で、一見先

づ作者の博覽と精力とに一驚を喫せざるを得ない。序論三章、本論六章、頁を費すこと六九頁、學餘これだけのものを作り上げられた作者の努力は驚嘆に値する。加之引証には悉く出所を明にし、研究の態度極めて眞摯、眞に學者的態度である。讀むにも中々骨が折れた。内容はとかくの批評を下すべき限りでない。悉くこれ當代斯界領學の所論の集成である。こんな専門的なことを批評するには、全様に又更に専門的な智識を要する。ともかく作者がこんな龐大なる集成をなされたことは眞に異とせねばならぬ。

生命躍動の歡喜 論理整然、領る穩健なる思索的論文である。それに何等學究的文字上の遊戯がなく、文章そのものが悉く詐らざる作者自身の體驗から生れておるところに此論文の價値がある。其精神内容の統一を説くが如くに、作者自身も統一し、文章そのものも統一しておる。ピツタリ呼吸が合つておる。贅言なく、間語なく、頗る要を得たものである。

考へ方もよく分つておる。從來の固定した觀念思想から脱して、統合作用に生命の根據を見附けて來な

のは近代學問上から言つても別に彼はいふべきこと
もない。註文を言へば彼はないでもないが、この種
の問題をこれ位に纏め上げられた手際はまづ見事な
ものだ。只一言言ひたいことは、現代の人は寧ろそ
の統合の理想―標準に迷つておるものであるまいか
その標準を訓へてほしいのである。權威ある標準を
そこまで突つ込んで行かなかつたのはどうしてであ
らう。これでは自我そのもの、説明は出來ておるが

懸賞論文採點表

標題	岡上	西川	宇美佐	竹内	飯島	總點	等級	姓名
生命躍動	95	85	70	80	75	405	1	小川久雄(文一、甲一)
古代史研究	90	83	68	75	70	386	2	加藤政和(理三、乙)
曙を見る迄	95	60	60	60	65	310	6	町野靜雄
秋	60	70	60	60	65	315	5	福田秀信(理二、乙)
滿鮮旅行記抄	70	70	70	75	60	345	3	前田五郎(文三、甲一)
思ひ出すまゝ	70	73	55	58	60	316	4	二村康(文二、乙)

自分を活かす眞の途が拓かれてゐない様な氣がする
が如何。大道長安に通ずれども、其道那邊にある？

お 謝 り。

宇佐美教授は選評をお寄せ下さつたのですが編輯に間に
合はなかつたため残念ながら不載の儘に致しますすべて
委員の責で茲に先生の御容恕を乞ひ併せて諸君に御知ら
せ致します。

(委員)

秋田 實

すべて創作は、情熱を生命として直に人に迫る。墮して技巧の末に走るものは虚言家のそらごと、閑人のあそび、物好きの頑弄に行詰る。感激を欠いで偏に題材の新奇を喜び文字や言葉に囚はれた概念の羅列が何を訴へ得るか、いま／＼しとよりは寧ろあはれを催す。人に人格の大小情調濃淡自ら別があるそれはそれでいゝ、只あるがまゝにすなほに正直な描寫を尙ぶ。傾向を帯び、人を強いんとする説明は作品を狭小偏頗にする。

國境の人々 長白山を遠景に殖民地の荒涼たる叙景のうちに回想祈念するは主人公である、暴徒來襲の不安に對する國境駐在の人々の態度や處世觀人牛觀を會話を主とした描寫で、作者を忍ぶに足る純な心の持主の若い主人公が悲憤の極熱狂遂に地位を捨て、走る途上であることがよくわかる。事件は實に意外な發展をするものである。お貞さんは殖民地

の美人、云ふ迄もなく荒める女汚れた女であるが、それはわが關する處ではない只眼を見た、一切を淨化するやうな眼を見る、目は魂の社である。人に尊き純情を理解するにはわれも亦純情を持つものでなくてはならぬ、果然滿洲鍛冶の淪落の女も再び處女に蘇る（此處少しセンチメンタルだがこれは若い人に難ではない、大体に於て小説化せざるを嬉しいと思ふ）そこに運命に従ふ女の忍従の徳と云ふやうなものが見える、祈らざるを得ぬ、かくの如くして男の心と女の心と堅く結び付いた。

第三者がある、傲慢と嫉妬の外には何にも無い人間である、斯様な人格の存在の理由は薄弱であるにも拘らず頑強に不法な暴威を逞しうするものだ、亡ぼされるか自滅するか所詮助かる道は無い、即ち此小説の署長の謎のやうな死様に見える。

話は今逃走中の身悲しき現實の上にかわる。追手が迫る、不正に對する怒に燃わながら女の爲め又彼の成功をあたに待つ母の爲めに祈る、此人は義しき人その祈には力がある、その心持には答へてやりたいこの二人の男女の行衛不明に結ぶ軽い結末はこし

へたやうでなく頗る自然で誠にいゝ感じがする、餘韻ある、上作。

鹽船 港の夜景を叙して、無理でも通さうとする横着な親方と據處ないと云ふ使用人の傳統的義理を道徳としてゐる船頭との問答で筆を進めて行く。しつかり者の女房の顔を見ると斷つて來ればよかつたと思ひ、それでゐて女房の出方でムツトする、馬鹿正直と親方がみくびつてゐる男だ、今日船頭になる迄の叙述が裏書としてよく利いてゐる（此處で作者に一言云はねばならぬことがある、如何なる文句が這入る處か知らぬけれども初めから九行と云ふものを白字にして置くとは何の爲めか、厭氣がさす、こんな手法は拙い）荒天氣に東洋豪傑振りを發揮して出帆する突走る、到着港には親方が來て居て一杯飲まず、それでもう怨も何も残らぬ、持つて歸つた土産物を女房が海へ投げ込んで了ふ筋合は、航海中によく分つてゐる筈であるに、粗雑な頭には不思議に思へることもいゝ。用事はすんだ、役を全うして歸港する、いたはりたい心持が裏切られて親方や店員の冷淡な態度に憤怒の爲め口も利けない労働者

の心の行き方をこの時一度暗示を受ける、主婦が内幕のはからひに心の和むのはほんとうだ、しかし俄に金が手に入ると大膽になつて船をはなれて酒に走るところ如何にも船乗である、飲相手の口から彼一家が當然親方を怨まねばならぬ釋を云はせて悲しい思出にうつる順序大變いゝ。留守にした船は今や沈没せんとする大騒中、夢中にかけて彼は親方の顔を見る一時にかつとなつて來る、これにも理由がうんとある、もう知らん／＼と水船になつて沈み行く鹽船の中を泳ぐやうに歩いて行く親方を眺めてゐるすつかり捨身になつた、或る程度以上感情の働かなくなる人間の氣分と途中の叙述、かう行かねばならぬ性格の發展誠に周到、處女作とは信せられぬ傑作で「國境の人々」が宗教的純情に殉じてゐるに對してこの作は科學的に心理の描寫に味を見せてゐる。

勝利 やぐさ者がうよく／＼してゐる世間に稀に眞面目など云はれる人間がある、何時まで續くかが見物で、境遇が順調であればそれですむ、然し順調はやがて平凡だ、平凡はつまらぬ、淋しい、そこで下宿屋の子子が兎角材料となる、焦慮と懊惱の中に

羽が生れて夏虫の身を捨てての先は宿命的に安價な歡樂境にきまつてゐる、全く月並のデカタンである。只此處には國元に女房があつて冷い女だ、温いのが欲しいと思つた心の衷に彼女に復仇してやつたやうな心地がしたと云ふ一句かあつてオヤツと注意を引いた。

白銅貨　ちめ／＼した藪の側の孤屋に、女房に走られて肝癪持になつてゐる父とすなほな無垢の少年が住つてゐた、少年には慰めがない、本を借りて來るだけでも暗い氣持を味はねばならぬ、母は歸つて來ぬでもない、父もさう云つてゐると云ひながら袖に涙を拭ふ子供である。偶然酒屋の釣銭が五錢白銅貨一つ多かつた、問題は此五錢である、修身書、物の本に書いてある話はこの五錢は恐ろしい返へせと云ふ、何でも買へるのだぞと云ふ金の魔力は密かなる喜を囁く、少年は岐路に立つた、誘惑の聲が勝つた、藪の石の下に埋めた時酒屋の同情ある老婆の眼鏡が目の前にチラツと浮んだが同時に安心した心持が湧く、ペスタロツチの畑の物である。子供を使ひやつた留守に淋しげにお伽噺の本を見てゐた父があ

はて、空威勢をはる處か一寸あはれに感ぜられる。
舊道て過つた二人　獨歩張りだと思つて讀み出したものゝ、如何にも描寫がもごかしくてだれた舊道の櫓の下を縁に、青春期の遺瀨ない心持を抱いた二人が偶然に相會して自然に親しみが成立つ副主人公が病的で厭味があるのが初めから頷かれる他所では全く屏息してゐる彼が年長らしい口を利くのを皮肉に思ふ氣概が中學生あたりにはふさはしい、やがて手紙が來る、結局同性愛の告白である、少年に近づく爲めに計畫的に二度の落第を敢へてしたと云ふ奇抜にして意氣地ない者の取るには可なり大坦な話や幸福の理合せには同量の不幸が伴ふと云ふ説などが見ゆる、然し主人公も亦同じ經驗の所有者である事は豫想通りであつた、愈々皮肉だ、性慾錯倒の實例と云つたやうな作である。鉛筆の片やズボンのボタンを愛惜してゐる男であるから自分が忘れた本や捨てた柴笛の木葉を拾つたやうだがそれ等も亦同じ運命になるであらうなど洒落や柔味もあるが、此小説が或る時代の憂鬱な心持を狙つてゐるものゝすれば失敗である、それは説明で引張らうとするが

らです。

弱き者の愛　愛人が失はれて行く、ごうかしなければと云ふ熱もなし、さればと云つて平氣を裝ふて居られる程の冷さも足らぬ一青年の憶病と後悔の心持とを云ふつもりであるが、淋しい、哀愁など自分て云つてはいけない。

好きなやうでも。びつたり來ぬ女性、それでゐて失ふことは惜しい希くば永久に現狀の儘いや少しづつは進んでも行きたい、こんな氣持がよく分る。これは果して此人のプラトニーック戀愛觀から來るのか、それとも青年の憶病から分らないが、一面女の性格によることはよく出てゐる、多血質の孔雀のやうな女であるが、會話には神經質な氣質も見ゆる、この點に平常陰鬱になりがちな男の性格とワアルフェルワントな處があるが、妙なチグハグな心持で女の處から歸つて來る主人公は即ち作者其人であらうと思はれる。性質を歩きぶりで示す友が、愛人の話を無頓着に語る處味い、此作者は友の鼻の先の露の描寫もする、其外隨處に心持の餘裕とユーモアがある、一寸面白いそれで讀ませて行く。青年の結婚

觀に觸れて軽く武者小路さんに當つたりなど愛嬌もある「戀愛を考へると頭が痛くなる、打算的ではない偶然的であるべきだ」と論ずる、「獨創の宗教」を叫ぶ、而かも宗教の道を歩むものは愛に到着することは御存知ない人だ。第一齣二齣を通じて人間ばなれの生活がして見たいとか、梯子の一段を下る毎に俗世間に近づくと感じる人だと頷かれる。

主人公と女との對話は、女の感情がつきつめて來る平常の性格から推してこれも亦一つの挿話にすぎぬかも知れぬものゝ、今は兎に角眞劍に肉薄して來た主人公の所謂戀愛は機會的と云ふ場面になつて來たそれでゐてそのたちたちとなつて受身なのが心理的に不思議に思はれる、理由が立たぬ、大團圓が來たのだ、すべての被り物を脱いで心と心の接觸すべき處である。

純な童貞者の困惑、氣合の合はぬ相撲、手も足も出ぬ、この際にあたつて尙冷靜に考へてゐるこれも性格が結局の筆は曖昧である、思はせぶりにすぎぬ。けれ共彼は遂に座を立つて了つた「苦みながら勝つた」何が勝つたのか分からない、ごんな意志が

勝つたのか、そして何に勝つたのか、純なる一切を忘れて全身を投げ出して來た愛情を蹂躪して無下に卻けたごごか、然し偉いことをしたとは本人も云はない。

愛せんとして愛し得ず又愛を受けるにも耐わられぬ現實と云ふものに恐ろしく虐げられて居ると云ふがこんな云ひ方では何の事か分らない、眞の感情には生きられないと云ふ處は愈妙な氣がする、弱いからだとは何の謂ひか。

最後に女の「あきらめ」に到る處に妥協(女の)根性が見ゆる、斷然男を去つて了ふ意氣がない、弱い女だと自ら云ふが全くだ、ロマンチックな女だ、性格が薄い、此男と同型だ。文末の「戀するも相手を傷けぬやうそは愛するが故に」これが全篇の基調をなして居るつもりであつたことを認めぬでもないが、問題を除き大きくして手に餘つた觀がある。

犠牲者 來るべき聖を生む爲めに自分は犠牲として著作を書く者であるとの意味を一幕詩劇で宣傳してゐる。詩にはゆとりがあり、含蓄があつて、かう自由の境に引かれる處に感興も起らうと云ふもの

だ、莖弱のやうに只腹の中のを皆突き出したと云ふきりでは能が無いではないか。親鸞と、死んだキリストと、ワシントンが聖貧禮贊で握手してゐる斯様な考へ方が最近の流行で一燈園は大變景氣がいゝ、懺悔は大切な難行であるが、どうすれば人は罪を犯さずにゐられるかは各方面に亘つて大問題である。

涅槃の大歡喜に入るまで「善人になりたいと祀る必これで一切の罪を許るせと云ふ處まで到達して主人公は吐血昏睡する、何だかこれでは安じて死ねぬ心地がしたのであらうまた蘇生する、今行つて來た天國が自分には勿体ないと云ふ、果して救はれてゐないのだ、もう一度説教しなければならぬ、然し教を説く者自ら天國に入る能はず又人をも入らしのざるものが多い。偽らざる自分の日誌を公表して呉れとの注文であるが、これは讀まぬでもよいらしい、内容には己に洩れてゐるのだから即ち人間は皆幸福に平等に與かれなくてはならないと女中の女のことを心にかけてゐる、こゝで許婚の女が嘲笑を洩らす、母の目が險しくなる、もうそこに救はれざる女がある

わけだ。又妹には今迄と變らぬやうにと望み、弟には自分と同じ道に入れよと勸む、此注文にも無理があるではないか。主人公の心持は成程純であらうが果して人を傷ける事なしにすむであらうか、自分は満足の歡喜に死んで涼しい處へ行くいゝ氣なものだ。信仰は依然びとりよがりのものとなつてゐる、眞劍なやうでもあり際物のやうでもある、内容も容物も手に入つてゐない爲めか。最後に讚美歌で陽を沈めてゐるが餘り永い、全幕を通じて西山にたゆたつてゐたものと思はれる。

岐阜提灯

ひとしく酷暑の陽に身を曝らして牛馬の如く水災後の堤防に働くものゝ中で、賃錢の得られるものは何もない人間で、多少なりとも自分の物と云ふものを持つ地元の者は復舊工事に喘ぎながら只過ぎし禍を呪ふてゐる、世は様々だ。酒に飲まれて不行跡の直らない車力をつかまへて、酒の失敗や馬の尿に立つ虹まで描寫の爲めの描寫に忠實であるが、文章はまづい、此一篇全体からして何の爲めに書いたものかわからないやうにして了ふ、損な事だ。割引しても同じ賃金にさへなればいゝ、馬と道

路が餘計に傷むばかりだと考へてゐる男に金が身につかう筈はなし、果ては馬まで取替へて了ふ、そのまた跡仕末まで人の世話になりながら、ボンヤリ見上げた醉眼に娘の初盆の提灯が映つた、それが岐阜提灯だ、あんまりあつけない。

波

幼き日の記憶の全部を以つて結び付けてゐる彼の女は悠久の彼岸までわがものだ、こんなシンブルな安心を持つてゐる男は必ず疑惑と嫉妬に惱む日が来る。彼女の素振りが怪しい、確かめて置かねばならぬ、ぶつかつて見やうか、もしやの場合が恐ろしい、と云つてこのまゝで放つて置くことは出来ない、試験準備を控へて悪い問題が起つた。この邊は面白い處があるのに、此作者の筆には惜しい氣がする。戀の敵と憎んだ先生は、どう較べて見ても優れてゐて、いかにも自分と云ふものが醜劣なものに見ゆる、彼女は當然先生に價する、先生のものだ、然し先生はやつぱり先生であつた、胸の波は遂に静まつた、星がまたゝいていた、これですんだものとして落語位の深さしかない。

そのかみ

しつこくて、徹底せんで、云ひたい

このうまく云へない、借物の文句を綴り合はせたりやうで辻褃の合はない、肚のない、幼稚な論理を立てる、勝手にこしらへ上げる、それでゐる材料が女で、鏡を出して見たり、もだわたり、ひねくれたり實に困つた。支拂日の親子の會話だけは眞物のやうである、菊池寛の小説をほめて小説が好きな作者であることだけは讀めた。

習作戯曲一篇 少しでも讀んだ物である以上は皆さらけ出さねば損だと云つたやうに拾ひ上げてこしらへた思想斷片投入函であります、況んや習作でありますから動きがとれません。

女不具者とその姉 實にたわいもない。大阪朝日の田中古代子作「諦觀」位でも比較して考へるがいゝ、今頃小學生のお伽噺にだつてこんなもので感激するものはありはせぬと思ひました、成金を呪ふ文句などをかしくなります。御修養のこと。

(十月二十五日稿)

○ 長江無何有

一般に出來榮わが、前回に比して、確に良好であり

ます。思ひ切つた駄作の評壇に上らなかつたのは可賀事であります。

女不具者と其姉 今一呼吸も二呼吸も熱が缺けてゐる。時間の経過にも無理が有る。

波 魔女の一節一寸好い想ひ附きます。發端一陽來復の書き振りも面白い。懊惱疑惑嫉妬が産み出す種々の妄想幻影を經緯（ていねい）に織りなされた作品であります。さらぬ事をさある事の様々に考へた心裏を畫いた比較的困難な方面の闡明であります。だが未だ密境の堅壘に肉薄したと言ふ迄で、前人既開發の心の領域を一步たりとも後にしてゐないのは遺憾であります。

岐阜提灯 長所は正しく觀察の精緻と的確な點に存してゐる。此點に於ては恐らく今回の作品中此篇こそ最も成功したものであらう。のんだくれの龍吉と馬の外的叙述は手に入つたもの。岐阜提灯の題號は氣紛れのだ。漱石の言つた通り題號はいくら符徴だつて。夫れから大切な大切りを、「九ツの娘の死の初盆だ。秋草の模様（しづま）の付いた岐阜提灯」云々で着けやうとしたのは、題號の爲に罷々くつ附けた様で

追ツかないやうな氣がする。何とか他に掉尾の一工夫が有つて貰ひたかつた。

勝利

會話がほんに月並になつてゐる。而して長く書かせたら、屹度會話拙手の尾を出し相な氣味合が見ゆる。作者にも此不得意を自覺してか、會話が定たやうに入口に止まつてゐる。題材が古いだけ御手本は澤山ある。加之自己經驗をなすにも案外無難作なるだけ、作者は其題材の扱ひ方に、甚大甚深の努力を要したのであるにも關はらず今更取り出で、言ふだけの新し味の無いのは情ない。

そのかみ

文學は歴史とは違ふ。感傷的氣分と言ふ文字が一頁の内に二箇所も顔を出してゐる。讀者は其僻其氣分を味はして貰ふ事は毛頭出來ないのである。感傷的氣分なる文字が、文學に在つては、必ずしも常に正面から飛來するを要しないのである。さる氣分を讀者をして、滲々と體驗せしむるやう書き廻すのが文學だ。「猿跳んで一枝青し峰の松」でこそ、一望白皚々の銀世界、満山の雪景色も忍ばれるのである。これはほんの一例に過ぎないのであつて此作中には在々處々文學と看るよりは、寧ろ科學的

記述と斷じた方が可然乎と惟はるゝ節が認められるのである。語路にも異しい所不自然な箇所が指摘し得らるゝ。

犠牲者

すら／＼と書き流され勁駿な筆跡ではあるが、殘念ながら型に嵌り過ぎてゐる。女中の主人公に對する態度も、さる對象とは思へぬ程よそよそしい。縦令言葉は無くとも、少くとも、と書きの中に充分心狀の吐露はある可き所だ。髯頭の舞臺裝飾は、さばかりはと思惟せらるゝ程綿密な僻に。登場人物の數も餘計なのがある。

鹽般

兎に角首尾纏りが有つて一曲を成してゐるのが有り難い。郷土文學に屬する。方言に郷土の匂ひを漂せてゐるのは結構だが、金比羅山とか何々岬（其名を寫し取ておかなかつたが）とか有る中にY市と出られたのは、折角の郷趣を臺なしにされたやうな心地がする。不釣合だ。源之介の人物は生きてゐる。照應もあり、構圖にも、着想にも、着色にも、深且大なる注意が瀾漫してゐて、一寸隙の無い行き方だ。慾には、娘花子の死を追憶裡に紹介せらるゝ、わたりを、今一段も二段も端折つて貰ひたかつ

たのである。此處には印象派とか象徴派とかの筆致こそと惟ふが、この處所詮念が入り過ぎたとの誹りは蓋し免れ難い事であらう。

白銅貨

御伽譚が前後に何の影響も無いのに、便々だらりと細叙されてゐるのは、御伽譚其物が目的の様で、修辭的に洵に不經濟だ。二十錢を持つて一体幾何の釣錢を貰つて歸つたのである乎。評者は老婆(?)の釣錢の渡し誤りを意味してゐるのではない。其以外に作者に於て、第九第十兩頁邊に於て、辻褄の合はぬ計數上の不注意を演じてをらるゝやうに感ずるので設問したのである。前後を總合し精讀せらるゝに於ては、這裡に不合理の伏在してゐるのに氣が付かれよ。夫れから「同じ穴のあいた型で流用されてゐる頃です」も、時間的誤謬が踏つてゐる。穴明き貨弊は、五錢にしる十錢にしる、今以て通用してゐるではないか。夫にも不關過去形の「されてゐる頃です」の用法は、何としても合點が行きかぬる。

習作戯曲一篇

何の爲に書き入れたのだらうか會得の行かない箇所がある、電報の件も兩親殺害の文句の如き即ち夫れである。意あつて筆足らざるが

爲に、不可解の文句が、時折姿を現するのではなからうか。終末も以心傳心的で一種の謎だ。安武の繁野に對する詞調は、まあ何とした横平な事であらう安武と高田とは單に親友の間柄ではないか。滿更無教育でも無きさうな繁野が又夫れを當然と言つた風に應對してゐるのも變だ。

國境の人々

同郷の薄倅兒が異郷に於て、戀に落つと言つた筋だ。之に巧に不逞鮮人の襲撃と、高木署長の横戀慕とを絡むだものだが、構想も無難であり、性格の書き別けにも、相當の努力が認められる。のではあるが、肝腎の主人公の性格に不一致がある。饒使椅子を揮ふて署長に傷を負はせるまでは情に激せる餘りに出でたる一時的發作に然らしむる所と、立派に説明が附くにしても「熱烈な基督教徒」と銘を打つてゐながら、時に福音を説いてゐ乍ら、戀人の爲にのみ祈り、仇敵を赦すの雅量なきのみか却つて眼は何時までも憤怒に燃ゆるばかりで、かつて反省の煌きだに示さざるは、果して法悦に浴した人と稱せられやうか乎。看板に對し矛盾に非ずして何であらう。寧ろ信徒の看板を掲げしめずして、單に

一刻者として性急者として、眞摯誠實ではあるが、情に激し易き人物として、初めより登場せしむ可き所ではなかつたらう乎。

弱き者の愛

能く見る Primärliebe を書いた

もの。作者は同音字でさへありや、如何な文字を用ゐても可いものだと考へてゐらるゝではなからう乎。得意に對し二三箇所とも特意、相愛に想愛、をかしくにおかしくの類が夥くある。此筆法で行くと、とんでもない滑稽が演ぜらるゝものである事を觀念されたい。夫れからS市とかN家とかH子とかTといふ寒村とか、出たりや出たりO、N、Mを始めとし、×より△に至るまで宛然代數か三角のやうな光景は奈何に近時の流行とは言へ、近頃以て感心不仕。第三に「泣いてく」とか「此世は苦しい」とか「寂しい」とか「悶々苦む」とか言つたやうな文字が頻に徘徊するが、畢竟字引的配列に終つて仕舞つて、一向讀者には厭生的な氣分や、感傷的な感想などは浮むで來ない。作者自身には正しく浮かばさうと苦心して居られるのではあらうが。併し斯く成果つるが當然なのである。开れば本文(五)「そのかみ」の條下に於て

既に他の表現法でもつて述べておいた通り、想像に翹へられないで、多く理智に依頼せられたからである。第四、ヘツベルを拙手に模擬たやうな Philophien の跡迹がある。此武器を、文の林に用ひる事は何人が使ふにしたらからが、元來危険物であつて、天晴見事に利用されるればこそ、文に幽玄の妙を加へる事が出来るものゝ、大多數の場合は先づ以て、失敗の主因を構成するに了るものであります。

終にざつくばらむに書き擲ぐられたのではないかと推測さるゝ邊の在る事と、語尾の變挺へんていの箇所が少ない事と、今一つ歐文直譯體と稱しょうた如ごとな文体迄が混和して、行文の流暢を、愈よもつて澁滯させて居ると言ふことを附記しておかう。

舊道で遇つた二人

同性愛を描いたもので、這

種の雜誌向きとしては什麼な物であらう。作としては驚嘆に値する程周到な注意が籠つてゐる。伏線もあり。一小事に臻るまで油斷が無い。發達の行程にも、大体に於て無理が無い。心中を打開ひらするに至るまでの道中が、長いと言へば長いとも諄くいとも斷せられはしやうが、包藏せる胸奥の秘密が秘密だから

反つて此方が自然であらう。anfachの點はウエデ
 キンドを憶起せしむる。終りに近くに從ひ、骨格に弛
 みは無いが、文に洗鍊が不足して來た長篇に動もす
 れば伴ひたがる病弊ではあるが惜むべしだ。石に温
 か味の有る所よりして腰掛けし人の有つたのを察す
 るなどは、成程觀察の緻密の程が窺はれて、敬服す
 る次第ではあるが行人の去り行く距離より推考する
 と不眞實に墮してゐる。(をばり) 十月三十一日

序に此機會に、委員並に應募者諸君に御願ひ致して措きたい事が
 あります。开れば餘の儀ではありませむ。猶し今後とも如從來懸
 賞文を募集されるのでありますならば、應募者諸君に於て、應募
 文の文字を一層鮮明に認められたい事でありませむ。成程今日迄の
 應募文中にも、字体の鮮明ならむ事に留心された方は無いではあ
 りませむが、之と同時に常に不鮮明に書いて出さるゝ方々の必ず
 若干有る事を乍遺憾公言せざるを得ないのであります。或は原
 稿紙の區劃を無視して放埒なる擲り書きで、而も一區域内に二字
 を填めて見たり、或はハヤライヤリヨラワヤラヤラ見界の立
 たない様な乱暴な書き振りをしたり、階書で書かせて見たら、恐
 らく作者自身にも正確には書け相も無い字を、行書で認めて、強
 て其場を糊塗せむとせらるゝのではなからうか。邪推の一つも、悪
 い事ではあるが仕度なるやうな無鐵砲なものあつたのであります

以上は獨り審査員に無用の勞苦と時間とを要請するのみならず。
 應募者諸君自身にも、誤讀され誤解せられ、延ては、榮冠を他に獲
 得せらるゝの不利をも招徠せられぬとも限らないのでありますか
 ら今より以後、自他の爲に計つて、字體を叮嚀に明確に認められ
 ないのであります。

小説戯曲の月旦は、單に内部的價値のみに重きを措く可きではあ
 りませむ。形体の上にも、之に劣らぬ批判を加へねばならないの
 であります事は、已に業に作者諸君の御承知の通りでありますか
 ら。所謂文字の末なればこそ諸を忽になるを得ないのであります
 夫れにてに、むはなる語尾位はとて軽く考へられるのであ
 りましたやうか從來の經驗に徴しますと、乱調狂態の程が一層烈し
 くなつてゐるやうであります。不幸恚る應募文に遭遇せむか評者
 は一二字の爲に再三再四前後を讀み返さざるを得ないのでありま
 す。夫も其等一二字ばかりの不明であつて見れば、甚麽にか讀了
 もなるのであります。折節は之に不透明な思想や方言などか結
 合いたしますので、前進のならないやうな破目に陥るのでありま
 す。幸乎不幸乎。從來の應募文は其數、常に十二三を出でないで
 居て呉れましたので、時間に掛けて、兎に角此羅透難解を讀破す
 る事が出来たのであります。應募文が今假に從來の二倍も、三倍
 もあつたとすれば、評者は果して公餘充分に、其重責を全うする
 事が出来たであらうか。

文字だに鮮明ならむには、所謂餘計な勞苦、餘計な時間潰しを免
 れるのでありますから、夫れだけ激濁たる勢力を以て、審査員は其

作品に臨み得のであります。従て比較的、より穩健なる批評もなし得るのであります。其上文學の批評は價值批評に屬するもので論理的批評とは其趣を異にしてゐるだけ、困難の度合も一層であります故、此點よりも、應募者諸君に向つて、冒頭の希望を敢てせざるを得ないのであります。而して委員諸君には、此希望の實現に倍蕙の御助力を煩したいのであります。實は今度に限り此希望を爲さざるべからざる特別の理由は存在してゐないのであります。毎回次回よりは自然改まる事と期待しては、沈黙し來たつたのであります。其が、幾度乎裏切られましたと、今回亦或程度まで同様な經驗を重ねさせられましたのと、困りよりして、終に、斷然茲に不遠慮にも主觀的經驗より生れた此希望を卒直に餘白を借りて申述ぶる事に致しました。後の批判者の爲に道を坦におく事は吾等の義務でもありますから。他の審査員の方々も、同様の希望を抱懷されて居らるゝ事と存じます。

西澤 富則

讀過の際に於ける第一印象を、ざつと並べ立て、見ませう。批評は讀んだ順序です

一、岐阜提灯

△焼け附く様な炎天の下に油汗を流して働く勞働者、其背景、地方色、まあ描寫にやゝ見るべき鮮明さがある様です。

△龍吉——一寸我を突つ張つては見るもの、自我に目覺めてをらぬ、すぐ他の強大な壓力にへな〜と崩折れる不徹底な、お人よしなタイプ、所詮今の世に最も多く見かける平凡な勞働者タイプ、金を得れば直に之れを酒と女に代へて醉生夢死するありふれた性格——やかつて哀愁となつて軒先の提灯に亡き兒の面影を忍ぶ感傷——筆にはのびる力があります。

二、波

△一篇のアウフバウは、割合に整つてゐます。

△心理解剖のメスに折々鋭い物凄光を見せながら、時々其の裏刃や、柄元に變な錆や、しみが現れたりします。

△多少持ち扱つたテーマに、陳腐は免れまうまい平凡位の所で喰ひ留めれば結構です。

△全篇のアウフバウの整ひ方には、先づ申分はないとして、文章の生硬なのは又どうした事せう。

三、そのかみ

△波に比して結構が甚しく劣ります。

△三節から成つてゐる病床日誌の様なもの。第二節は全くのエピソッド。第三節にストレッヌを置く

ものとすれば蛇足、否な馬鹿々々しい。

△第二のエピソードは、あれだけ取り出して、極めて立派なもの。ヒステリーの叔母がよく出てゐます。Yなる青年の悲憤の涙も安價ではありません。

四、弱き者の愛

△當字、誤字、その亂暴なこと、いやはや驚きました。

△成程弱き者の愛、ルーヂンめきて非なるものか
△内容は割合に具はつてゐますから、之を盛る器にもそれ相當の研きをかけて下さい。

五、女下具者とその姉

△只一言、もつとく、うんと勉強して下さい。

六、鹽船

△中々の凡手ではありません。

△ツツのない作。

△海が實際に吼わてゐます。風が颯々うなつてゐます源之助、親方、女房皆な如實に躍動してゐます
△此の作家は大いなる海の Kenner であらねばなりませんまい。

△近頃かういふ佳作は、午鱈に中央文壇にも顔を

出さぬ様です。

七、白銅貨

△「人間の世界には恐ろしい早魘が来た」といふ處で、「飯が焦げるぞつ！」など云ふ心惜い技巧に、ニツト微笑を強ひられます。眼鏡一つで老婆を生かしてゐる手法も亦同巧。

△かういふ作では、篇中の小供の様な純真な心にかへつて、ごこまでも素直に描いて下さい。鹿爪らしい心理的お談議は、まづ禁物でせう。

△作爲の跡のないよい作。

△貧家に育つた十三才の男兒の心のシムボルとして、この白銅貨はもつと外に使ひ途がなかつたでせうか。

八、國境の人々

△危なげのない作。丁度此作にあらはれる鴨綠江上、嚴冬數尺の堅氷を踏んで行く様な安らげさ、堅實さを見ます。堂々たる家の風格を成してゐる様です。

△青年の熱と愛と信と切々として人の琴線に觸れるものであります。

△最後の省筆法の如き決して凡手のよくなし能はざる處でせう。

△一篇の構想殆ど間然する所はありません。

九、勝利

△會話にも、地の文にも方言がいやに耳障りになつて、東京を舞台とした此の作には甚だふさわしくない感を抱かせます。

△文章を大いに洗練していただきたい。

△ハンドリングが、何の思慮なしに、雑作もなくあつけなく、ごしく進んで行きます。悪い善いと言はない事にして。

十、習作戯曲一篇

△習作といふに敬意を表して評はいたしませぬ。

△只習作として、君の筐底に深く藏してをかれたらばと思ふだけです。

十一、犠牲者

△信と熱とを取ります。

△平板、單調の如く見えて、割合に舞台効果を發揮すべき技巧をわきまへた作家であります。

十二、舊道で遇つた二人

△二人とも淋しい淋しいをお題目の様唱へておりますが、余り讀者に共鳴させる或る物を持つてゐないのは何故でせうか。

△テーマは相當に面白さうなものでありながら、これだけにしか、表現出來ないのは、物足らなく思ひます。

色々悪口ばかり申上げて誠に申譯がありません。妄評の責はご迄も負ひます。不惡御諒承あらん事を御願ひいたして置きます。(十、十、廿七)

河瀬 嘉一

犠牲者

鐵雄の信仰が慫うした奇木細工みたやうなどあれば別ですが、もう少し首尾一盡したものでなくてはなりません。茂の言葉ではないが「兄さん、何だか少しもわからないよ」と云ひたくなります。とは云へ談む劇としては纏まつてると思はれます。

波

自惚と疑惑との闘争。嫉妬の雲散霧消。纏まつた作。強ひて難を云へば一、二、が餘りに長くして三は急いだ氣味がありますまいか。前半だけでも

見られるのに後半を無理に加へた氣味があります。
好きな作。

女不具者とその姉 もつと工夫しなければなりませんまい。

舊道で遇つた二人 變態性慾講義とでも云ひませうか。時、處人みな異常。これだけ念頭においてかゝればよく書けると申されませう。

白銅貨 お婆あさんからお釣をくすねるところは背かれます。恚うした夢を見ることの好きな兒にはあり勝ですから。才筆。ただ取材が取材ですから上滑りのしない書振りをしなくてはなりません。

勝利 お春が美代子のことを妹かと訊ねる、これで前夜からの癡顔氣分の意義を實悟して、彼によつて満たされないと此によつて補ひ、矛盾した復讐の勝利を叫ぶ。此の五がよく書いて居ます。二、三、四は一つに纏めて書いて欲しかった。四の性格一變したところは一の女中との會話でよく暗示されて居ます。

習作戯曲一篇 心餘つて筆及ばずといひたい。そのかみ。病床で心急いでるところを探ります。ワ

イとダブルユとは無くもがなの性格。とし子との交渉は遊戯三昧。望むところは作者の自覺と表現の妥當と。

國境の人々 新附の國境における官邊の腐敗。倫落の女と基教主義の男。無謀と暴行暴舉。いかにも廢類した氣分が出て居ます。事項が過多なのにこれだけ纏めれば手柄。

弱き者の愛 若い者だけのたはむれ。媚を呈して來る女に對するところをもつと突つ込んで書かなくては「弱き者」が明かに判りません。菊川に訪問されてからの煩悶も不足。

鹽船 人の好い源之助が親方ゆゑに捨鉢になる叙述精細。理路整然詩味豊富、いな過多。半枚ばかり白くして書いてないのはどうしたのでせうか。まさか伏字のところでもありませんまい。

岐阜提灯 歡樂の後の悲哀。村の人たちが醜いところをさらけ出しているところを面白く見ました。前半の馬を勵ましながら働いているところ。それから酔ひしれて後の悔を残すくんだり。後半、ふと目をやれば秋草模様の提灯。夫婦の氣拙さ心淋しさ。變化が

あり過ぎる。古い想ですが捨て難い味がないでもありませんすまい。(大正十年十月二十九日)

八波 則吉

選評といふほどのものではないが、通讀の際心おぼに書きつけて置いたものを其の儘。

鹽船 労働問題を軽くにはよせて、船頭夫婦の生活を描いたもの。處女作とあるが可なりの出来は、船の事には餘程知識があると見て、テクニクの中には割註が欲しいものさへある位。

懸賞創作採點表

等級	題名	學年級	作者	審査員	採點	採點	採點	採點	計
1	鹽船	理三甲二	深川俊男	秋田教授	83	80	84	88	403
2	國境の人々	文三甲三	松村基樹	河瀬教授	85	85	80	85	393
3	岐阜提打	文一甲二	徳廣巖城	長松教授	72	75	85	70	367
4	舊道で遇た二人	文二乙	山本直太郎	西澤教授	73	73	81	70	357
5	波	文三甲三	増谷久雄	八波教授	67	73	78	70	353

概して説明が多過ぎる。特に花子を亡くした追懐がくどい。全體幼稚な筆遣いではあるが、如何にもつましく、無邪氣で、毫も厭味のないところが氣に入つた。

國境の人々 題が好い。題材も悪くはない叙述もすらく癖はないが、ごことなく活動の筋書を讀むやうな氣がする。

岐阜提打 馬夫龍吉の享樂を書いたもの。鹽船と似通つたところもあるが、これは放膽。何の苦もなく書いてのけたのが面白い。健筆。

丙種

上田 英夫

私は八波先生と共に、詩、歌、句を見せて頂きました。それに就いて何か書けどの仰せですが、別にどりたて、申し上げる程の事もないので、別に見しながら、感じたことは、詩よりも歌の方が、歌よりも句の方が、大體に於て優れてゐたといふことでした。尤もこれは一概には申せないことで、同じ句の中でも良いのと悪いのとがあり、又同じ詩の

12	11	10	9	8	7	6
女不具者と姉	そのかみ	戯曲(習作)	弱きもの、愛	勝利	犠牲者(戯曲)	白銅貨
理一甲	文一甲二	理二甲一	理二甲一	文二乙	文一甲三	文二甲三
徳永郁介	今吉顯一	橋本義郎	佐々龜雄	高津英雄	永松定	後藤壽夫
45	58	50	73	73	73	75
45	50	58	55	63	68	70
42	48	60	65	67	69	70
45	65	60	55	65	78	80
20	40	40	45	55	50	45
217	261	268	293	323	338	340

中でも良いのと悪いのとがあるのは申すまでもないことですが、概して申せば短い詩形のもの程成績がよかつたやうに思はれます。これには種々なる原因もあることでせうが、まづ句のやうな短詩形のものである作者の直感を其まゝ文字にうつすのに比較的便利であるのに反し、詩のやうな長詩形になると餘程作者の心持の緊張の持續を要し、又表現上にも餘程の手際を要します。これは中々馴れないでは出来なない業で、多くの場合、中途心持の弛緩を來たしたり、不純な心持が交つて來たりするのが常です。今

度拜見した幾多の作詩の中にもかういふ破綻を來た
 したのが多かつたと思ひます。それに、作者が讀書
 知識から來たらしい生煮の思想感情で書いたもの
 も少くありませんでした。青春の惱みとでもいつた
 やうなものを象徴的に表さうとした作品も二三あり
 ましたけれど、皆象徴といふものを誤つてゐたため
 か一向響かないものになつてゐました。何はともあ
 れ作詩の際、最も忌むべきものは成心です。こんな
 ことを作つてやらうではいけない。吾々は總ての衣
 を脱ぎすて、眞裸体となつて作詩にかからねばなら
 ないと信じます。

短歌を選ぶのには、専ら作者の技倆本位と致しまし
 て、作の一首一首に就いて兎や角は致しませんでし
 た。即ち連作精神に基いて、作全体を通じて作者の
 心の姿を見たつもりです。
 最後に、比較的無難であつた俳句に就いて一言いた
 しますと、屑はないやうでしたが、大抵の人がまだ
 舊い型にとらはれてゐたやうでした。この點に於て
 は短歌などの方には遙かに頭の進んだ作家があつた
 と思ひます。ただ俳句は全体として無難であつたと
 いふだけのことです。

懸賞長詩採點表

等級	題名	學年級	作者	審査員	上田教授	八波教授	總點
1	蟬と蜘蛛	理一甲	徳永郁介		70	70	140
2	黄なる一葉	理一乙	三宮貞壽		67	55	122
3	郊野	理二乙	大久保治敏		58	60	118
4	輝く行手	文一乙	東島徹志		62	45	107
5	癡つかれず	文三甲二	栗生哲夫		64	40	104

俳句採點表

等級	題名	學年級	作者	審査員	入波教授	上田教授	總點
1	祖母の命	文三甲二	森本治	吉篤	80	75	155
2	雜詠	理二甲一	小島久	篤篤	68	65	133
3	夏より秋へ	文二甲一	小川久	雄	65	65	130
4	秋來ぬるこ	文二甲二	田嶋圭	一	60	62	122
5	うた十首	理一乙	福田秀	信	60	60	120
6	生くる日のよろこび	文二乙	中村政	雄	40	60	100
7	偶感十首	文二甲三	属村教	一	40	55	95

短歌採點表

11	くもり	理二乙	近森誠一	郎	50	35	85
10	花の中にて	理二乙	野村靜	雄	53	40	93
9	山に	理二乙	渡邊伊勢	雄	54	40	94
6	赤き眞實	文二甲二	今吉顯	一	50	50	100
6	太陽の寛大	理二乙	福田秀	信	60	40	100
6	燈さ月影	理三甲二	橋本秀	二	60	40	100

7	6	5	4	3	2	1	等級
屋	野	馬	石	堆	雜	材	題
來	良		だ		題		
紅	者	子	み	肥	旬	木	名
文一乙	文一乙	文二甲一	文一乙	文二乙	理三甲三	文二甲三	學年級
緒	大	藤	深	伊	谷	森	作
方	島	村	水	藤	口	本	者
正		次	長		義	忠	審
人	大	郎	春	功	治	八	員
55	60	65	70	75	80	85	八波教授
63	63	65	67	65	69	70	上田教授
118	123	130	137	140	149	155	總點